



「余韻が残るような演奏を」と、井川さん

輝いています

ヴァイオリニスト

ひと

井川 知海 さん

クラシック音楽を身近に

独

自の世界観で聴く人を魅了するヴァイオリニスト・井川知海さん(24歳、塚越7丁目)。先月、留学先のポランドから帰国した新進気鋭の若手音楽家の一人です。今月25日に下蔵公民館で開かれる「さくらコンサート」(お知らせ版8頁)に出演します。ヴァイオリンを手にしたのは3歳の頃。もの心ついたときには常に傍らにある、音楽が大好きな少年でした。当時は出身地の静岡県浜松市から新幹線で著名な演奏家の下へ。各コンクールでも入賞を重ね、早くからその才能が注目を集めました。また、中学時代には同市と音楽文化交流を行うポランド・ワルシャワ市に

親善大使として訪問。音楽が生活に溶け込む風土に強く感化されました。その後、音大付属高校への進学を機に蔵へ。仲間と切磋琢磨する一方、交流を続けていたポランドにも渡り腕を磨いていきました。「より本格的に学びたい」と、高校卒業と同時に単身ポランドへ。門をたたいたのが世界屈指の名門・国立シヨパン音楽大学です。ヴァイオリン専攻は日本人でただ一人という環境に身を置いた井川さん。当初は言葉の壁、短い準備期間で挑む公演、難解な現代音楽の習得など、困難の連続でしたが、日々音楽に向き合い没頭していきました。そしていつしか井川さんの奏でる音色は学科を超えて知れ渡るほど評判に。習熟された演奏技術は、優秀な学生たちが集うなかでも、ひととき異彩を放つまでになつていきました。「クラシックに親しんでもらえたらうれしいですね」と、演奏会を心待ちにしている井川さん。折り紙付きの技術はもちろん、楽曲の鑑賞を引き立てる軽快なトークも見どころの一つです。同世代のピアニスト・野口咲さんと奏でる名曲の調べに、皆さんも耳を澄ませてみてはいかがですか。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No.10 —



現在の茨城県古河市で生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
~明治22年(1889)

幕末の文久3年(1863)、第14代將軍徳川家茂の上洛という、第3代將軍家光から230年ぶりに行われた幕府の大イベントに合わせて、江戸の版元23軒と浮世絵師16名が力を合わせて出版した、通称「御上洛東海道」シリーズの1図。暁斎は本図を含め29図を描いています。家茂は4月28日から29日まで、再度大坂湾周辺のお台場巡察を行った際、紀伊半島の加太へ上陸し、その後6月13日に海路江戸へ帰る途中にも紀伊大島へ上陸しています。紀伊藩出身の家茂にちなみ、紀伊半島の名勝那智の滝が描かれたのかもしれませんが。右上には、崖上から滝を眺める將軍一行が小さく描かれています。

河鍋暁斎記念美術館

「暁斎・暁翠 旅と風景」展

期間=3月1日(水)~4月25日(火)

開館=午前10時~午後4時 休館=木曜日

毎月26日~末日 ところ=南町4-36-4

入館料=一般320円 中学生~大学生210円

小学生以下105円 詳細=同館(☎441-9780)

(20人以上の団体は要予約)



本作品は現在の展覧会で御覧いただけます

暁斎筆「東海道名所之内 那智ノ瀧」
文久3年 大看板 大判錦絵



展覧会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください